

日本の子どもたちの身体運動に対する意識 —日本の子どもたちと韓国の子どもたちの比較から—

叶 俊 文

I 緒 言

子どもたちの遊びの中心というのは、外での遊びが大半であった時代がある。その遊びが1980年代後半に登場したテレビゲームの台頭によって大きく様変わりをするようになっていく。また、学習塾に通う子どもたちが増えていくことによって、子どもたちの放課後の生活スタイルが変化しているように思われる。

叶・木戸(2010)は名張市の小学6年生の運動・遊びの調査を行い、子どもたちの半数以上が週3日以上習い事を行っていることを示した。そして、その習い事までの時間をゲームを中心とした遊びで埋めているのではないかと指摘した。女子では友だちとおしゃべりして過ごすという姿もみえてきた。もちろん、その習い事がすべて学習塾ということではない。学習塾に通っている子どもが多いものの、男子ではスポーツ系の種目に通っている子ども、女子では音楽系の内容をも示している。しかし、こうした習い事に押されながら遊びの時間は減少し、時間がないことから自宅の中や友だちの家の中で過ごすことになっている。

外で遊ぶよりもスポーツ系の習い事に通うことによって、日本の子どもたちの身体活動量に二極化が生じていることが指摘されて久しい(笹川スポーツ財団, 2001)。身体活動量の多い子どもたちは、学外のスポーツ少年団やチームに所属して活動を増加させているのに対して、身体活動量の少ない子どもたちは学校の体育の時間以外にあまり身体を使った活動をしないということになる

う。しかし、子どもたちの良い生活習慣には運動に関することが大切であることを多くの保護者は認め、スポーツをすること、外で遊ぶこと、よく歩くことなどを生活に取り入れたいと考えている(中村ら, 2001)。こうした状況の中で、日本の子どもたちは身体活動や運動することをどのように意識しているのだろうか。

そこで、本研究では日本の子どもたちが体育や運動を行うことに対してどのような意識を持っているのかを再検討することを目的としている。日本の子どもたちの状況を理解するためには、外国の子どもたちの状況と比較することで新たな視点が見えてくることも考えられる。今回は韓国の子どもの状況と比較しながら日本の子どもたちの意識を再検討していく。韓国は2002年に日本とのサッカーワールドカップを開催し、ベスト4に入るというスポーツへの関心も高い。同時に、OECD 生徒の学習到達度調査や国際数学・理科教育動向などにおいても飛躍的な進歩を遂げている。現在では日本よりも高いレベルにある領域も多く、運動だけでなく学業でも日本の先を行きつつある国である。その点で、日本の子どもたちとの比較を行うには好対象の国と考える。

人が行動に向かうキッカケを考える概念として、動機あるいは動機づけがあげられる。様々な動機が指摘される中で、スポーツや運動において、運動へのやる気などを考える重要な動機づけの要素として達成動機が位置づけられている。達成動機は「難しいことを成し遂げること、障害を克服して高い水準に達すること」への動機で、尺度の開発も行われた。達成動機は様々な行動の始発としては重要な要素であるが、難しいことを成し遂げるという状況から「失敗したらどうしよう」というマイナスの要素も、その状況に関与することが考えられた。これらを考慮して「達成動機づけ=達成動機-失敗回避動機」というアトキンソン・モデルなどが示され、達成動機づけは行動に対して推し進める要素と留まろうとする要素、そして状況からなることが指摘された(宮本, 1979)。この指摘を適用して Shimoyama(1974)は達成動機に関する項目とテスト不安の項目から達成動機づけ尺度を作成している。こうした達成動機は困難な場面を提供する体育・運動場面において子どもたちを活動に向かわせるための重要な要素になる。また、体育・運動場面での成功体験は子どもたち自身に

有能さの感情を与えることになろう。

一方で、有能さを目指す行動として達成行動を捉える考え方も示されている。行動の基底には有能さへの希求があり、有能さを目指す行動において達成目標というものが極めて重要であると位置づけている。NichollsやDweckによる一連の研究から、目標理論を土台として学習目標(learning goal)と遂行目標(performance goal)という目標の違いによって、その後の行動の仕方が異なってくるという達成動機づけ研究が進められてきた。その一つが達成目標志向性になる。達成目標志向性は学習目標志向と遂行目標志向の2つの志向に分けられている。学習目標志向は能力を伸ばしたり、新しいことを習得することを目標とする志向であり、遂行目標志向は課題を遂行していくことによって成績や評価を得ることを目標とする志向になる。学習目標志向は活動すること自体を目標とするので、結果にかかわらず活動を持続させることができることになる。遂行目標志向は結果を求めることを目標としているので、良い成績であろうとも結果がでることによって活動が終了することになる(宮本・奈須, 1995)。叶・奥田(2008)は学習目標志向が成功場面での努力帰属から影響され、遂行目標志向が他者のまなざし、課題の困難度帰属から影響されることを指摘した。活動自体を目標にする土台には自己の努力があり、遂行目標志向が成績や評価を求める背景には他者を気にすること、課題の易しさが関与していることを示している。このように達成目標志向性は特性的な捉え方ができるようにも思われるが、生得的な側面よりも獲得された人格特性と位置づけられることにもなる。

達成動機にしても、達成目標志向性にしても、大きな枠組みとして達成動機づけ研究に含まれている。人が何かひとつの行動に一生懸命取り組んでいる姿を説明しようとするときに、その人のもつ背景を達成動機づけの側面から検討していくことができるようになる。これは子どもたちが運動に向かうときの説明にも援用さなる。一生懸命に鉄棒の逆上がりを練習する子どもの背景にはどのような達成動機づけが働いているのかを検討することは、子どもたちのその後の運動への向かい方を考えるうえでも重要になるであろう。

本研究では子どもたちの運動に対する意識を検討することを目的にしている

が、その運動への意識を達成動機づけの側面から考えていく。運動についての達成目標志向性からは、運動すること自体を楽しもうとする学習目標志向と運動することによる結果を得ようとする遂行目標志向がどのような状態にあるのかをみていく。また、運動に対しても日常の生活状況においても重要な要素になる達成動機の状態についても考えていく。そして、こうした達成動機づけによって引き起こされた結果は、自己の有能さの認知に結びつくことから、子どもたちの獲得されたコンピテンス(有能さ)との関係を明らかにしていく。日本の子どもたちの状況を比較するために、韓国の子どもたちの調査との比較を行い、日本の子どもたちの現状の把握と今後の課題を考えていきたい。

Ⅱ 方 法

1. 調査対象者

本研究の調査対象者を表1に示した。調査の内容への回答可能性を考慮して、日本と韓国の小学校5・6年生を対象とした。日本の子どもたちは三重県、滋賀県、東京都など広範囲での調査を行うことが可能であったが、韓国の子どもたちについては浦項市が中心になった。

調査時期は韓国の子どもたちについては平成15年4月～7月、日本の子どもたちについては平成18年12月～翌年2月にかけて実施された。

表1 日本と韓国の調査者数

	男子	女子	合計
日本	360	397	757
韓国	103	100	203
合計	463	497	960

2. 調査内容

1) 個人プロフィール

基本調査として学年、性別、好きな教科、運動への好意を尋ねている。

2) 達成目標志向性

上淵(1995)が作成した達成目標志向性を測定する尺度を運動場面に記述内容を修正したものを用いた。この尺度は学習目標志向について11項目、遂行目標志向について9項目からなる20項目で構成されている。これらの項目について4件法で回答を求めている。学習目標志向の得点の幅は11点から44点になる。

遂行目標志向の得点の幅は9点から36点になる。

3) 達成動機

達成動機の測定には Shimoyama (1974) が作成した達成動機づけ測定尺度を用いた。この尺度は18項目からなり、4因子構造になっているが、日本の大学生での調査において因子分析を行った結果、3因子を抽出している(叶, 2006)。このように対象による違いも考えられることから、因子分析によって構造を確認する必要がある。18項目については4件法で回答を求めた。

4) 自己価値

自己価値の測定には櫻井(1983)が作成したコンピテンス測定尺度を用いた。このコンピテンスの測定は4つの要素からの測定が行われている。その中の一つとして自己価値が位置づけられている。自己価値はコンピテンスの中でも全体的な個人の属性を測ろうとするもので「自分についての全般的な有能感」と捉えられ、現在の自分の自信や自分への満足などを確かめながら評価するようになっている。自己価値の測定は10項目を用いて行われ、4件法で回答を求めている。そのために得点の幅は10点から40点ということになる。

3. 調査の手続き

日本の子どもたちについては、学校のクラス担任の先生にお願いして調査用紙の配布および回収をお願いすることとなった。韓国の子どもたちについては、大学教授にお願いし、基本的にクラス担任の先生に配布および回収をお願いするように依頼している。

4. 統計処理

調査によって得られたデータの処理については、因子分析、2要因分散分析はSPSS 14.0を用い、多変量回帰分析にはAMOS 5.0を用いて統計処理を進めた。

Ⅲ 結 果

1. 運動・体育に関する意識

個人プロフィールで尋ねている好きな科目と運動への好意について、日本と韓国の違いをみている。

日本と韓国の好きな科目についての両国の男女別の度数を表2に示した。その他にまとめられている科目は両国の科目の特徴的なものが含まれている。韓国では特別活動、英語などである。日本では書写、総合が含まれている。比較対象としては両国に共通するものを中心にみていく。男子について、韓国の子どもたちは算数が好きな科目の第1位になっている。次の体育とはあまり差がみられない。これに対して、日本の子どもたちでは体育を一番好きとあげている子どもが圧倒的に多くなっている。次の社会との開きも大きくなっている。この両国の違いは大きな違いになっていると思われる。女子では、韓国の子どもたちは体育と音楽をあげている割合が高くなっている。次にあげられるのが算数になる。そして、図工、国語と続いているが、割合は10%を切っている。日本の子どもたちは体育をあげている割合が高く、これは男子と同じ傾向ではある。しかし、割合としては男子の半数である。次に好きな科目にあげているのが音楽と図工、家庭になっている。

好きな科目として、日本の子どもたちは体育をあげる割合が高く、加えて女子は音楽、図工、家庭という実践系の科目を好んでいる。韓国の子どもたちは体育をあげている子どもも多いが、男子では算数、女子では音楽、算数というように、算数を好きな科目としてあげている割合が高いことが日本との違いになっている。

次に、運動への好意についての割合を表3に示している。これは運動することが好きなのかどうかを尋ねている。「とても好き」「すこし好き」を合わせると日本も韓国も男女において80%の子どもたちが運動することに対して好意的

表2 日本と韓国の好きな科目の割合

	男子	国語	社会	算数	理科	音楽	体育	図工	家庭	その他	合計
韓国男子	度数	5	3	28	8	4	25	5	2	18	98
	%	5.1	3.1	28.6	8.2	4.1	25.5	5.1	2.0	18.4	100.0
日本男子	度数	9	46	32	31	7	181	30	7	8	351
	%	2.6	13.1	9.1	8.8	2.0	51.6	8.5	2.0	2.3	100.0
韓国女子	度数	8	3	11	3	18	21	9	5	20	98
	%	8.2	3.1	11.2	3.1	18.4	21.4	9.2	5.1	20.4	100.0
日本女子	度数	13	28	19	16	68	109	68	40	30	391
	%	3.3	7.2	4.9	4.1	17.4	27.9	17.4	10.2	7.7	100.0

表3 日本と韓国の運動への好意の割合

	男子	とても好き	すこし好き	わからない	あまり好き ではない	とても きらい	合計
韓国男子	度数	52	36	5	6	2	101
	%	51.5	35.6	5.0	5.9	2.0	100.0
日本男子	度数	261	74	12	10	3	360
	%	72.5	20.6	3.3	2.8	0.8	100.0
韓国女子	度数	37	42	7	9	4	99
	%	37.4	42.4	7.1	9.1	4.0	100.0
日本女子	度数	163	164	26	42	1	396
	%	41.2	41.4	6.6	10.6	0.3	100.0

に思っていることになる。中でも日本の男子は93%の子どもたちが運動への好意を示している。また、女子では10%の子どもたちが日本でも韓国でも運動に対して好意的ではないことが認められる。

2. 各要因の分析

運動への好意、達成目標志向性、達成動機、自己価値について、それぞれの要素ごとに得点化し、国別(2)×性別(2)の2要因分散分析を行った。

運動へ好意について、「とても好き」を5点、「とてもきらい」を1点として得点化したものを自己の運動への好意得点として分析した(表4)。その結果、国別の主効果($F(1,954) = 10.93, p < .01$)、性別の主効果($F(1,954) = 32.07, p < .01$)が認められた。国別では日本の子どもたちが韓国の子どもの子どもたちよりも、運動への好意得点が有意に高いことが認められた。性別では男子の方が女子よりも運動への好意得点が有意に高いことが認められた。

達成目標志向性について、学習目標志向と遂行目標志向の下位尺度ごとに分析を行った(表4)。学習目標志向では、国別の主効果が認められた($F(1,956) = 5.39, p < .05$)。これは日本の子どもたちの学習目標志向得点よりも韓国の子どもたちの学習目標志向得点が有意に高いことを示している。遂行目標志向では、国別の主効果が認められた($F(1,949) = 91.36, p < .01$)。これは日本の子どもたちの遂行目標志向得点よりも韓国の子どもたちの遂行目標志向得点が有意に高いことを示している。

達成動機について、最初に因子構造を確認するために探索的因子分析を行っ

表4 日本と韓国の各要因の平均値

		日本		韓国		分析結果
		男子	女子	男子	女子	
運動への好意	M	4.61	4.11	4.29	3.95	日本>韓国**
	S D	0.76	0.99	0.95	1.19	男子>女子**
<達成目標志向性>						
学習目標志向	M	32.83	31.91	33.48	33.52	日本<韓国*
	S D	6.51	5.98	5.83	5.61	
遂行目標志向	M	18.83	17.93	22.27	23.06	日本<韓国**
	S D	6.29	5.37	5.18	4.44	
<達成動機>						
失敗への恐怖	M	18.21	19.10	21.77	23.33	日本<韓国**
	S D	5.91	5.46	5.59	5.25	男子<女子**
達成への願望	M	14.19	13.95	13.11	12.98	日本>韓国**
	S D	3.59	3.29	3.34	2.99	
達成への選好	M	10.41	10.54	9.87	9.90	日本>韓国**
	S D	2.14	2.04	2.10	1.95	
自己価値	M	25.36	23.27	28.17	28.09	交互作用*
	S D	5.59	4.74	5.54	5.55	

*p<.05 **p<.01

た。その結果、3因子が抽出された。この3因子構造は叶(2006)が大学生に対して行ったときと同じ数の因子数であることから妥当と考えられる。また、因子を構成する項目から Shimoyama が示した内容との対応がみられることから、3因子を「失敗への恐怖」因子、「達成への願望」因子、「達成への選好」因子と命名した。失敗への恐怖因子は9項目、得点幅は9点から36点、達成への願望因子は5項目、得点幅は5点から20点、達成への選好因子は4項目、得点幅は4点から16点となった。失敗への恐怖、達成への願望、達成への選好の下位因子ごとに国別(2)×性別(2)の2要因分散分析を行った(表4)。失敗への恐怖では国別の主効果($F(1,956) = 76.56, p < .01$)と性別の主効果($F(1,956) = 7.61, p < .01$)が認められた。国別では韓国の子どもの失敗への恐怖得点が日本の子どもたちの失敗への恐怖得点よりも有意に高いことを示している。性別では男子の失敗への恐怖得点よりも女子の失敗への恐怖得点が有意に高いこと

を示している。達成への願望では国別の主効果が認められた ($F(1,954) = 14.67, p < .01$)。これは日本の子どもたちの達成への願望得点が韓国の子どもの達成への願望得点よりも有意に高いことを示している。達成への選好では国別の主効果が認められた ($F(1,954) = 13.04, p < .01$)。これは日本の子どもたちの達成への選好得点が韓国の子どもの達成への選好得点よりも有意に高いことを示している。

自己価値では交互作用が認められた ($F(1,955) = 5.90, p < .05$)。下位分析を行ったところ、男子では韓国の子どもの得点が日本の子どもの得点よりも有意に高く、女子においても韓国の子どもの得点が日本の子どもの得点よりも有意に高い値となった(表4)。国ごとの比較では、韓国の男女の比較では有意な差異は認められなかったが、日本の男女の比較では男子の得点が女子よりも高い傾向が認められた。これらは韓国の子どもの自己価値の意識が高いことと、日本の女子の子どもの自己価値の意識が低いことを示している。

3. 多変量回帰分析の結果

運動への好意と自己価値に対して、達成目標志向性の下位尺度と達成動機の下位因子がどのような影響を及ぼしているのかを検討するために、多変量回帰分析を用いてパス図の作成を行った。国別と男女別で分析を行った結果を図1に韓国の適合モデル、図2に日本の適合モデルを示した。韓国のモデルでは、韓国の子どもの運動への好意についても自己価値についても、達成目標志向性の学習目標志向が男女ともに影響していることが認められた。また、男子では失敗への恐怖が自己価値に対してマイナスの影響があることが認められた。日本のモデルでは、日本の子どもたちの運動への好意についても自己価値についても、達成目標志向性の学習目標志向が男女ともに影響していることが認められた。また、達成動機の失敗への恐怖が男子では自己価値に、女子では運動への好意と自己価値の両方にマイナスの影響をしていることが認められた。

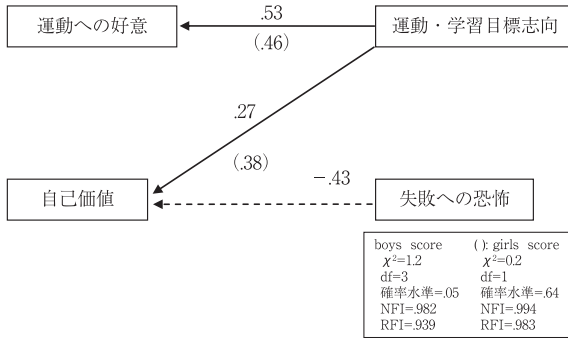


図1 韓国の子どもたちの多変量回帰分析の結果
(男子, 103名 女子, 100名)

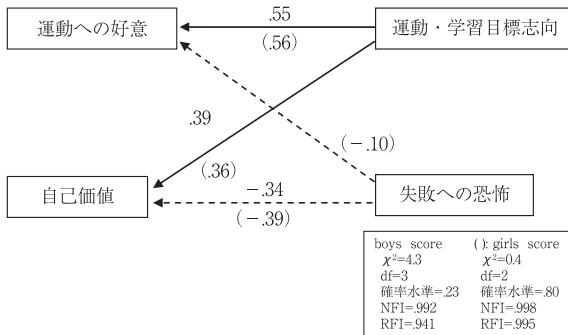


図2 日本の子どもたちの多変量回帰分析の結果
(男子, 360名 女子, 397名)

IV 考 察

運動への好意と達成動機については、日本の子どもたちの得点が韓国の子どもたちよりも高い値を示した。達成目標志向性と自己価値については韓国の子どもたちの得点が日本の子どもたちよりも高い値を示すことになった。

運動に関する達成目標志向性について、学習目標志向は運動すること自体を目標とする志向で、学習での理解や学習での成功を感じ、遂行目標志向は運動の結果を目標とする志向で、仲間などよりもできるときに成功を感じることが

指摘されている。この志向性においては、日本の子どもたちが韓国の子どもたちよりも低い志向性を示していることになる。藤田(2009)は体育授業において課題志向性(本研究での学習目標志向と同意)と自我志向性(本研究での遂行目標志向と同意)の両方が高いことが内発的動機づけを高める要因になり、体育授業の楽しさに結びつくことを指摘していることから、韓国の子どもたちが運動に対して高い動機づけをもっていることが示されたことになる。しかし、日本の子どもたちの数値が極端に低いわけではないことから、ある程度の運動に対する動機づけが高いのではないと思われる。もうひとつの特徴として、日本の子どもたちの女子の得点に低さが認められることである。学習目標志向においても遂行目標志向においても4つのグループで一番低い値になっている。松平・高井(2010)は子どもの運動意欲を支える社会心理的要因の研究において、小学校高学年の女子の運動に対する向上心の低下と身体活動量の低下は、高学年になると身体運動についてめんどろに思い、関心が低下することによることを指摘した。日本の女子の高学年における達成目標志向性の低さは、運動に対する意欲の低下からきているのかもしれない。

達成目標志向性とは逆のことが達成動機では認められた。失敗への恐怖では日本の子どもたちの得点が低く、達成への願望、達成への選好においては日本の子どもたちの得点が韓国の子どもたちの得点よりも高くなっている。これは日本の子どもたちにとっては良好な形ということになる。失敗への恐怖が低いことは失敗を恐れずに活動に向っていくという姿勢があり、達成への願望は最後まで達成することを望む傾向を示し、達成への選好は達成がわかるような活動を好んで選ぶ傾向を示し、どちらも活動に対して積極的な姿勢になる。これらの点では日本の子どもたちが韓国の子どもたちよりも優れているということになる。今回の達成動機の測定には運動場面を想定しているわけではなく、一般的な状況を想定している。そのために日本の子どもたちの結果は、普段の生活における意欲ややる気の高さと捉えることができることになる。

日本の子どもたちの達成目標志向性の低さ、達成動機の高さの逆転現象は自己価値にもみられる。韓国の子どもたちの得点が日本の子どもたちの得点よりも自己価値の得点では高くなっている。櫻井(1983)は認知されたコンピテンス

の中の自己価値について自分についての全般的な有能感として、現在の自分の自信や自分への満足が反映されているとしている。日本の子どもたちの自己価値の値は韓国の子どもの値よりも低く、特に女子は一番低い結果となった。物事を成し遂げるために方向づけていくのが達成動機づけであり、達成によって個人は有能さを獲得することにもなる。その点で、韓国の子どものたちが優れているということになる。しかし、ここまでのところでは、運動への好意と達成動機では日本の子どもたちが得点として優れ、達成目標志向性と自己価値では韓国の子どものたちが優れるという形になった。これを考えるために多変量回帰分析が行われることになる。

運動への好意と自己価値に影響を及ぼす構造はどのようになっているのかを、多変量回帰分析によって明らかにした。これは運動についての達成目標志向性と行動に対する達成動機が、現在の運動への好意と現在の自分に対する自己価値に影響を及ぼしているのではないかという考えに立っている。つまり、運動に対する意識としての運動への好意にしても、自己の有能さとしての自己価値にしても、達成動機づけとしての達成目標志向性と達成動機が影響していると考え、どの要素が重要になるかを検討して今後の指導に役立てることが出来るものと思われる。両国の男女別に分析を行った結果、男子では日本と韓国ともに同様の構造が明らかになった。一方、女子では日本と韓国の間違った構造が見えることになった。

男子では、運動への好意と自己価値の両方に対して、運動についての学習目標志向が影響している。学習目標志向が高いことが運動への好意や自己価値を高めるということになる。もうひとつは達成動機の失敗への恐怖が低いほど自己価値にプラスに影響するということになる。女子では日本と韓国の構造に違いが認められる。韓国の女子は運動への好意にしても自己価値にしても、運動についての学習目標志向だけが影響している。それに対して、日本の女子は両方に学習目標志向が影響しているのは同じであるが、達成動機の失敗への恐怖も両方にマイナスの影響をしていることになる。つまり、韓国の女子は学習目標志向だけが影響を及ぼしているのに対して、日本の女子は失敗への恐怖を下げなければならないということになる。

日本でも韓国でも、運動への好意と自己価値に対して、運動についての学習目標志向が影響することになった。運動についての学習目標志向は運動すること自体を目標とする志向であることから、成績や評価を気にするのではなく、運動そのものを楽しむという意識になる。これは内発的動機づけにもつながることでもあり、運動に対しても自己の有能さに対しても、子どもたちが与えられた活動そのものを一生懸命に取り組んでいくという姿勢が重要になることになろう。運動有能感の高い生徒などは体育の授業に意欲的に楽しく参加し、自ら課題を設定して、挑戦することに高い意識をもっていることも示されている(井上・岡澤・元塚, 2008, 井上・岡澤, 2009)。学習目標志向は結果に惑わされない姿勢にもつながることから、日本でも韓国でも、運動や活動そのものを楽しんでいくという姿勢を育てていくことが重要になろう。

もう一点は失敗への恐怖の軽減ということになる。男子では日本と韓国ともに運動への好意に失敗の恐怖が影響するところはなく、一般的な有能感としての自己価値に影響することになる。これは普段の生活の中でのさまざまな事象に失敗を恐れずに向っていく姿勢が必要になることを表している。これは日本の女子にも言えることである。日本の女子の子どもたちは運動への好意にも失敗への恐怖が影響していることから、運動への回避や運動への面倒くささに繋がることになるように思われる。逆に、失敗しないことが自己の有能さの認知に繋がることを考えると、子どもたちにとって成功体験の積み重ねが重要になることが指摘できるように思われる。日本の子どもたちの学習目標志向の低さや失敗への恐怖の影響が意欲の欠如に現れるとすれば、子どもたちに対して運動課題を段階的に提供しながら確実な自信を育てていくことが重要になるのかもしれない。

最後に、日本の子どもたちのもう一つの気になる点に触れておきたい。日本の子どもたちは運動することに対して非常に好意的であり、運動についての達成目標志向性もある程度あり、達成動機も高くなっている。運動への好意は当然運動する機会も多くなることを表すように思われる。藤田・佐藤(2010)は小学生と中学生の体育授業における動機づけの比較研究において、有能感が内発的動機づけにプラスに影響して、その動機づけを媒介として体育授業の楽しさ

に影響することを示している。運動体験は多くの成功体験も提供し、それが自己の有能感にも繋がることから子どもたちは体育の授業を楽しんでいると思われる。日本の子どもたちの運動への好意、達成目標志向性、達成動機に意欲がみられると思われるが、それが自己価値に反映されないという状況があるように思われる。体育の授業は身体を動かすだけではなくて、如何に効率的に、効果的に身体を動かすかを考える授業でもある。単に、身体を動かすことだけを目的にしてしまえば、体育の人気は「机に向う必要がない」というところがあるのではないかと推測もできる。それが男女の好きな科目の第1位は体育、特に男子は半数以上の子どもたちが体育を1位にあげ、男子の90%以上が運動することを好きと応える結果を生み出しているとも考えられる。今後は、この体育人気の背景を検討していくことも必要なのかもしれない。また、今回の調査においては、韓国の子どものデータ数が少ないことから傾向をみるという範疇に含まれるように思われる。これらについては今後の課題としたい。

文 献

- 藤田 勉 (2009) 体育授業における目標志向性、動機づけ、楽しさの関係、
鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 19: 51-60.
- 藤田 勉・佐藤善人 (2010) 小学生と中学生の体育授業における動機づけの
比較検討、鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編 61: 43-59.
- 井上寛崇・岡澤祥訓・元塚敏彦 (2008) 体育授業における運動有能感を高める
工夫が運動意欲および楽しさに及ぼす影響に関する研究、教育実践総合
センター研究紀要 17: 103-111.
- 井上寛崇・岡澤祥訓 (2009) 大学生の体育授業における自律性と運動有能感
との関係、教育実践総合センター研究紀要 18: 125-130.
- 叶 俊文 (2006) 日本と韓国の比較：大学生の学業・運動への意欲からの検
討、日本スポーツ心理学会第33回大会抄録集
- 叶 俊文・奥田援史 (2008) 子どもたちは運動することが嫌いになっている
のか-運動している子どもの心理的側面からの検討-、皇学館大学社会福
祉学部紀要 10: 93-100.

- 松平宗之・高井和夫（2010） 子どもの運動意欲を支える心理社会的要因，文
教大学教育学部紀要 44：129 - 142.
- 宮本美佐子編（1979） 達成動機の心理学，金子書房
- 宮本美沙子・奈須正裕編（1995） 達成動機の理論と展開 続・達成動機の心
理学，金子書房：187 - 215.
- 中村伸枝・石川紀子・武田淳子他（2001） 学童の親がとらえた子どもの生活
習慣と生活習慣が改善できない理由 - 運動習慣・食習慣・生活規律に焦点
を当てて -，千葉大学看護学部紀要 23：15 - 22.
- 櫻井茂男（1983） 認知されたコンピテンス測定尺度（日本語版）の作成，教
育心理学研究 31：245 - 249.
- 笹川スポーツ財団（2001） 笹川スポーツ財団スポーツ白書 - From Sport for
All to Sport for Everyone -
- Shimoyama, T. (1974) A validity study of a scale to measure achievement
motivation. Japanese Psychological Research 16：197 - 204.
- 上淵 寿（1995） 達成目標志向性が教室場面での問題解決に及ぼす影響，教
育心理学研究 43：392 - 401.

謝 辞

本研究は，平成23年度皇學館大学海外出張を受けて，6th Asian South Pacific Association of Sport Psychology International Congress においてポスター発表した内容を再検討し，加筆修正したものである。皇學館大学に対して感謝申し上げます。